



台湾の高校生と交流深まる

本校は今年度、県教育庁高校教育課の「教室から世界へ!かごしまグローバルクラスルーム」事業の指定校として、1年生が台湾の高校とオンラインで交流を重ねてきました。

事業の締め括りに、1月第4週の英語の時間は、交流相手から届いたメッセージカードに対して返事を書く授業を行いました。



生徒たちは、考えを英文で相手に的確に伝えるポイントを学んだあと、交流を通して学んだことや楽しかったこと、これから取り



組みたいことなどについて返事を書きました。生徒の一人は、「学んだことを基にポイントを絞って書くことができた。いつか台湾に行ってみたい」と語りました。

返事に使用したカードは、ヨロン島観光協会から、与論島の美しい風景写真のポストカードを提供していただきました。ありがとうございました。

与論高校の取組が本になりました

新しい学習指導要領の理念の実現に向け、本校における令和2年度からの学校マネジメントの全貌をまとめた『与論高校はなぜ定期考査と朝課外をやめたのか—改革を実現した学校マネジメント』が、この度株式会社学事出版から上梓されました(令和4年12月5日)。

「高校の特色化・魅力化」がより一層求められる現在、本校は「観点別学習状況の評価」の具現化をはじめ、規則や慣例の見直しなど、様々な改革に職員一丸となって取り組んできました。

これからも本校は、時代の変化とともに高校教育に期待されるものを見据え、生徒の成長を図り、地域のよりよい未来づくりに貢献する教育活動を追求し、展開してまいります。



なお、この本は本校図書室のほか、与論町立図書館にも配架されています。

キャリア教育の更なる充実を目指して

「校長通信(第29号)」でお伝えしたように、本校は今年度、キャリア教育優良学校として文部科学大臣表彰が決定。表彰式を兼ねた「キャリア教育推進連携シンポジウム」に参加してきました(1月19日/東京)。

表彰式後の講演では、キャリア教育は「生徒が将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力」を育む組織的かつ計画的な取組であることが改めて強調されました。



今回の表彰を励みに、本校は今後もキャリア教育の更なる充実・発展に努めてまいります。

PC端末で授業が変わる⑦(家庭)

デジタル社会を生きる高校生にとって、今やPC端末は、鉛筆やノートと並ぶマストアイテムです。文部科学省が推進するGIGAスクール構想を受け、県教育委員会は今年度から1年生全員にPC端末を1年間貸与しています。本校におけるPC端末を活用した各教科等の工夫を紹介します。第7回は家庭です。

1年生の家庭基礎の授業。この日の内容は「食品をどう選ぶか」。授業者はまず、生鮮食品を選ぶ際のポイントを生徒へ発問しながら確認。



次に魚、野菜、果物について、冬が旬のものは何かを問いかけます。生徒たちは資料集やPC端末で検索しながら調べるとともに、旬の食材を食することの意味を考えました。

後半は加工食品についての考察。前回の予告で生徒が持参した菓子類の袋や箱に記載された表示に注目します。商品の名称や原材料、賞味期限などの意味を確認したあと、記載された添加物について、PC端末で検索して確認します。

授業者は、「自分の体は自分が食べたものでできている。どの食品を摂るのかは、よく考えてから取捨選択すること。日常生活で分からないことは、まず調べるといった習慣をもつことが大切」と強調します。

授業後、生徒の一人は「添加物については知らないことが多い。検索して調べようになりたい」と語りました。

1・2年生が先月行った総合的な探究の時間「ゆんぬ」の発表会では、地域サポーターの方々から共感の言葉や助言をたくさんいただきました。探究活動に弾みがつき、今後の内容の深まりが期待できそうです。

さて、情報検索をすれば、自分の探究に近い内容を伝えるウェブサイトにくわしく辿り着くと思います。環境や少子高齢化、過疎化の問題などは、国や地域は違っても、その中心になって課題に向き合っているのは、これからの社会の中心になっていくみなさんと同じ10代、20代の若者かも知れません。

台湾のデジタル担当政務委員のオードリー・タン氏は、「これからの社会の形を考えるには、『ソーシャルイノベーション』を通じて、皆が参加できる社会にすることが重要」と述べています。

ソーシャルイノベーションとは、日本語に直訳すると「社会的な技術革新」ですが、タン氏はこれを「従来とは異なる創造的な解決法によって社会問題や課題を解決するという概念」と説明しています。

一般に、環境や社会問題について取り組む場合、まずは自分たちで団体などを作って解決しようとしまします。しかし、多くの企業や大学なども同様にそれらの問題を解決しようとしています。彼らは互いにベストな考え方を探り合うこともなく、別々の場所で、もしかすると真逆のことをしているかもしれません。これでは解決への道のりは遠くなりますね。解決に向けてすべての人が孤独に闘うのではなく、助け合えるようにソーシャルイノベーションを推進することが、世界中どこでも必要とされているというわけです。

社会問題は誰かが解決してくれるのを待っていたり、自分一人で解決しようとしても永遠にその一部しか解決できません。ソーシャルイノベーションの考え方で大切なのは、「共通の価値観」でつながって連帯していくこと。その中で、異なる能力を持っていたり、異なる角度で物事を見ることができるとタン氏は言います。

インターネットが当たり前の時代では、他の地域や遠い国での研究が自分の探究の手がかりになることもあれば、逆にみなさんの探究の成果が他の地域の人たちのヒントになるかも知れません。3年生のみなさんも卒業とともに探究を終えるのではなく、自分がこだわってきたテーマはこれからも大切に、関連する本を読むなどして考え続けてください。探究を続けることを通して醸成される思考は、自分自身に大きな成果をもたらします。たとえ一人一人の探究は小さくても、その蓄積がいつかきつと与論島や地域社会を変えていく力にもなっていくでしょう。

ところで、数学の分野の一つにカオス理論があります。カオス理論とは、簡単にいうと「初期値のごく小さ

な違いが、複雑で予測できない結果を導く」ということです。これは「バタフライ効果」という名前でも知られています。アマゾンで蝶が羽ばたくと、大気のごく小さな変化が起こって、それがあある一定の時間を経て、遠く離れたニューヨークの気象に影響を与えるといった例え話で紹介されたりします。

もう少し分かりやすい例で言えば、野球のピッチングマシンを使い、毎回同じ場所から、同じ条件と設定でボールを発射すると、ボールが地面に落ちる地点は数学や物理を駆使すれば計算できます。しかし、同じ場所と同じマシンでも、たった一つ、ほんの少し条件を変えるだけでボールは全く違う場所に落ちます。

それと同じように、私たちも自分の中のたった一つの思考をポジティブに変えるだけで、そしてそのポジティブな思考を本気で信じて行動するだけで、世界の見方を根底から変えることができます。その世界の見方は「結果を変える力」にもなり得ます。自分を取り巻く環境はコントロールできませんが、自分の思考なら自分自身でコントロールできるはずですよ。

最近読んだ本で「アファメーション(Affirmation)」という言葉に出会いました。「断言」「肯定」という意味ですが、心理学の分野では「自分が達成したいことをポジティブな言葉で語ることで自分を変えること」と紹介されています。目標がすでに現実になったかのように語れば、潜在意識がその言葉を信じて、それが現実であるかのように働いてくれるといひます。

2012年のロンドンオリンピック、ボクシング・ミドル級で、むらた りょうた村田 諒 太選手が金メダルを獲得しましたが、その偉業には、アファメーションがあったのは有名な話です。村田選手はオリンピックに向けて、ある言葉を書いた紙を自宅の冷蔵庫に貼り、練習に励みました。正確には、その張り紙は村田選手の奥様が実施されたことなのだそうですが、こう書いてありました。

"オリンピックで金メダルをとりました。

ありがとうございます。 村田諒太、

実現したいことを「完了形+感謝の言葉」で表す。これがアファメーションの言葉の代表的な例です。

潜在意識には大きな力があります。まずは、自分は自分の未来のストーリーを紡ぎ出す作家なのだと考えてみましょう。自分が達成したい目標をポジティブな言葉にして紙に書いてみる。そして、それを追い求めるのだと決意すれば、目標には命が吹き込まれます。

みなさん一人一人が大きく飛躍する令和5年になることを期待しています。

【引用・参考文献】オードリー・タン、近藤弥生子『まだ誰も見たことのない「未来」の話をしよう』2022年、SB新書/ヴェックス・キング（桜田直美 訳）『望む現実是最良の思考から生まれる』2021年、ディスカヴァー・トゥエンティワン/一般社団法人国際メンタルイノベーション協会『「人生を好転させる潜在意識の活用法」vol.15 村田諒太と潜在意識』<https://imia.or.jp/vol-15/>